野村昭嘉の「制作ノート」について

野　中　耕　介

はじめに　野村昭嘉という画家

佐賀市に生まれた画家野村昭嘉（のむらあきよし）（1964-1991）は、高校卒業後の1983（昭和63）年４月に上京、美大進学を目指し美術予備校や専門学校等で絵画を学ぶ。同時にアクリル絵具による作品を制作し種々の公募展に出品する。野村のアクリル画は現代の画材の特質を巧妙に引き出しながら、壁画を思わせる絵肌の中に、生物と機械、太古と未来等、相反する事物と時代が同居する独特の世界を展開した。それらは複数のコンクールで受賞を果たすなど高評価を得、彼は次代を担う逸材として将来を期待されたが、1991（平成３）年３月、不慮の事故により26歳という若さで生涯を閉じた。

2021（令和３）年現在、佐賀県立美術館には野村昭嘉のアクリル画作品47点、ドゥローイング及びスケッチ63点、関係資料12件が収蔵されている。これらは野村がその短い生涯において、画家として活動した期間の大部分の作品群であり、その画歴の全貌を伝えるコレクションであるといってよい。

収蔵される関係資料中に計６冊の「制作ノート」[(1)] がある。これらは野村にとって日記、またスケッチブック、雑記帳の全てに相当する役割を担っていたものであり、1986（昭和61）年から1991（平成３）年に渡る自筆の記録である。

本稿では、これら残された野村の「制作ノート」の概要を紹介する。これらにある文章等の記述及び絵を精査することで、野村の特異な創造力の源泉や、技法上の特徴あるいは造形に関する諸問題等がより鮮明になり、今後の野村昭嘉とその芸術の研究にさらなる深みを与える一助となるであろう。

野村昭嘉の「制作ノート」概要

野村昭嘉の「制作ノート」は計６冊が現存し、それらは市販のいわゆる「大学ノート」と「メモ用紙（コクヨ製計算用紙、上辺が接着剤で結合された構造）」の二通りの形式がある。（図１）各ノートは記入されたページ数、またページごとに記入の密度の違いがある。

制作ノートの内容は、野村自身がしたためた文章の筆記部分と、作品のエスキース（下絵）、アイディアスケッチやデッサン、戯画等の描画部分とに大別できる。筆記、描画ともに大部分は鉛筆によるもので、一部に細目のペンが使用されている。

筆記部分の文字は細かくかつ整然と書き連ねられており、その丁寧な筆致はあたかも自分以外の読み手の存在を意識しているかのようである。一方の描画部分は、１ページにつき複数点の絵が自由な配置で描かれている。いずれも軽めの筆圧ながら、モチーフのディティールが克明に描き起こされ、陰影の調子も明快である。それらはまさに野村の手先、あるいは頭脳内から「湧出するイメージ」[(2)] が連鎖し拡大していくかのような印象を見る者に与え、アクリル画に劣らぬ魅力を備えている。

計６冊のノートのうち３冊には、表紙に使用期間が記されているが、内容を確認すると他３冊も含めて時系列順に並べることができる。以下、各ノートの内容について、筆記及び描画された時系列に沿い紹介する。

（１）制作ノート１　「(1986.12～」

表紙に「(1986～」と年紀があり、現存するノートの中で最も早期のものである。略年譜（本稿Ｐ.18）によれば本ノートは野村が美学

校[3]及び東京芸術専門学校[4]に在校中に使用したものである。計19ページに渡り記入されており、その大部分が野村自身による文章で構成されている。１～13ページまでは各記述に日付が付された日記風の体裁である。それら各記述について、以下、日付と合わせて概略を記す。本ノートが使用された1986～87（昭和61～62）年は、野村にとって、基礎的修学を経ていよいよ画家としての表現活動を開始した時期に当たる。本ノートにはそのことが色濃く反映されており、少し詳しく紹介する。

①（1986.12）《ノクターン》５点の連作の概要

・作品《星の図》のマチエールについて

・作品《モルトプのプール》のマチエールについて

記録された野村の最初期の作例である。記述によれば、野村は美学校在学時に《ノクターン》と称する連作を構想、制作に取り組んでいる。「夜の雰囲気のある絵を描きたい」という制作意図のもと、「星、月、気、水、香」の５つの要素を絵画化するという意欲的な試みであったが、ただ１点《星の図》のみが完成を見たとする。（図２・2-1）そしてここには《星の図》の描画技法と画材についてのメモがあり、ジェッソ、グロスメディウム、シェルマチエール等の市販の画材を用いて「フレスコ画風の画面」の再現を試みたとし、その描画工程が図解入りで詳述されている。

古代のフレスコ画を想起させる乾いた絵肌への憧憬とその質感の再現は、以降の野村作品においても表現の基調をなすものであり、ノートの記述から、すでに86年時点においてその技術的な試行が始まっていたことが分かる[5]。また同様に、複数の作品を一体的な表現としてとらえる「連作」も、以降の野村が関心を寄せ続けた表現様式であった。《ノクターン》連作の取り組みは、野村にとって今後の創作の指標となる重要な作品群であったと考えられるのである。

②1987.5「フレスコ画風の雲の描写」

③1987.6「直立歩行するカエル」

④1987.6「カラスの頭部の天使」

⑤1987.6「ヴィーナス三態」

1987（昭和63）年４月以降、東京芸術専門学校在学時の記述である。前年から続いて「フレスコ画風」の絵肌の技法におけるさらなる工夫や、それを用いた複数の作品についての図解と解説である。

⑥テンペラ・油彩・混合技法解説

ア　テンペラとは何か

イ　テンペラの歴史的発展

ウ　ハッチング技法について

エ　混合技法の層形成

絵画表現の歴史と古典的描画技法、及び材料の組成等の解説と図解が記されている。簡潔かつ的確な記述で、学校での講義録か、あるいは技法書等文献の書写かと思われる。

⑦1987.6.18　自身の作品の主題について

⑧1987.6.「存在している自己」について

⑨1987.7.30　自作についての考察

⑩1987.8　人間の知覚等についての考察

⑪1987.10　自作と「絵画」についての考察

⑫1988.1　「フレスコ画風」の作品への取り組みと今後の活動について

⑬1988.2　マーラーへの傾倒

⑭1988.3　宗教絵画の印象、「ワイエス展」の感想と批評、「幻想科学小説」への傾倒と自作の解説

⑮1988.4　「科学」に対する論評

⑯1988.4.17　自己の創作のスタイル、方法論について

⑰1988.4.24「ホルスト・ヤンセン展」の感想と評論

⑱1988.5　卒業制作の主題と技法について

若き野村は描画技術を磨き、表現を追求する日々の中、様々な思索を巡らせ、それらを自身の言葉でノートに綴っている。自作の主題や制作意図に始まり、自己の存在についての考察や自然科学への関心、そして芸術の価値判断や批評等、自身の内面を鋭く照射し紡ぎ出したような峻烈な文面であり、言説を編むことで、画家としての自身の立脚点を模索しているかのような印象を与える。各々の言説は観念的かつ内容の飛躍が見られる部分もあり、必ずしも整理されたものばかりではないが、ここには野村の表現世界を解読するための様々なキーワードが含まれている。以下、その一部を抜粋する。

「私の絵の主題となるものは、それは、その物にいわゆる事物そのものではなく、その作品をとりまく空気である。(略)」

(⑦から抜粋)

「僕の絵を見て、ジュールベルヌとか、コナンドイルなどの19世紀末の幻想科学小説を感じる人がいれば私は嬉しい。実際僕は、そのころの骨太で未来を感じさせる、どこか風変わりな機械を思い描いて描いている。すなわち半分自然と同化した物体とまったく同化しきれない物体によって。(略)」

(⑭から抜粋)

「(略) フレスコ画的な色彩はかすみ、かすむという点で極楽といえる。世界間に通ずる所があるように思える。フレスコ画、フレスコ画、■線ににじみ出てくる色調の絵画。古めかしく、クラシックに、かつまた重々しく漂うように。」　(⑱から抜粋)

「私は風化した壁画のようなものを描いているが、それは現在にいたるまで、その絵におよぼしてきた自然の物理的な行為を描いているといえる。はたしてそれは、人が言う時間というものなのかもしれない。(略)」

(⑱から抜粋)

野村のアクリル画は、「長い年月を経て風化した、遠い古代の壁画やフレスコ画」の絵肌の中に、「機械のような無機的事物」と「有機的な生物」が融合した物体が描かれた「未来的な、なにか奇妙な感覚」が漂うものとして評されているが[6]、本ノートには野村自身による、これら作品のモチーフと表現の志向、それぞれの淵源についての告白がある。野村作品に描かれた無骨な機械の面影と質感は、例えばジュール・ヴェルヌ(1828－1905)の幻想科学小説、サイエンス・フィクションの世界観と意匠にその原型があるであろうこと、そして古代の壁画(フレスコ画)のマチエールが、「空気」や「時間」あるいは「極楽」のイメージを具体化するために、最適な触媒となり得ることなどが示されている。

(2)制作ノート2

1988(昭和63)年7月以前から使用されていたと推測される。先の(1)創作ノート1と異なり、大部分が作品のエスキースやスケッチ等の描画で占められている。

本ノートから、88年以降の野村のアクリル画作品に見られる特徴的なモチーフが登場する。土偶あるいは旧式の潜水用ヘルメット[7]を想起させる、穴が開いた球体状の物体をはじめ、流線型の体躯と二股の尻尾を持つ魚類(クジラやイルカ等)の図、また渦巻状の形をなす雲や波の文様、古代の煌びやかな金属製の装身具等が自在に組み合わせられ、多様なイメージが創出されている。また、個々のエスキース、スケッチ等の多くは矩形に収められ、限定された枠組みを持つ絵画作品(完成

作、タブロー）としての構図を意識して描かれている。本ノート内のエスキースにはタブロー化されたものが複数確認できるが、構図や空間の処理等については、エスキースの段階でほぼ完成していることが分かる。また、この頃（1988年）の野村作品は、空や雲あるいは地面等の奥行が明確に描写されていて、こうした空間表現が作品により物語性を与えている。さらに本ノートには「連作」の構想図がしばしば描かれている点も注目される。

野村は1988（昭和63）年７月にグループ展（目黒区立美術館）に参加し、また同年９月に初の個展を開催しているが、本ノートにはそれらの看板等のグラフィックデザイン、そして会場における作品の配置のメモがある。

（３）制作ノート３　「1990－1－7」

表書から1990（平成２）年の１月から７月まで使用されたノートである。内容はほぼ描画部分で占められるが、描かれた絵の空間表現に変化が認められる。作品は次第に平面性を帯び、事物の組み合わせはより細かく複雑になり、パズルあるいは機械の分解図さながらの構図が現れてくる。（図４・4-1）モチーフの描写はレリーフ状となり、また、金属の質感を備えたパイプ、シリンダーやボイラーを思わせる工業機械のような形状の物体が登場してくるなど、より人工的、機械的な印象を強めた作風への変化を見て取ることができる。

野村は1990（平成２）年の９月、「JACA'90日本イラストレーション展・招待部門JACAセレクション展」に連作を出品するが、本ノートにはそのアイディアスケッチとエスキースが描かれている。（図４・4-5）完成作品は計13点だが、スケッチでは計16点の構想となっていた。86年から見られるアクリル画の連作の構想が、ここでようやく実現を見たことになる。また本ノートには、上記展覧会のパンフレットに寄せるコメント（作品解説）の草稿がある。前出（１）制作ノート１に綴られた言葉に比べより柔らかい語調である。

（４）制作ノート４

計３ページのみに記入がある。４連作のアイディアスケッチ及び水槽内部と思しき小さなスケッチが描かれている。

（５）制作ノート５　「1990.8―1990.12」

1990（平成２）年８月から12月の記入分である。前出（３）制作ノート３と同様に多数のアイディアスケッチとエスキース等が描かれているが、魚類や蛸といった生物等とともに、「人物」の横顔がモチーフとして頻出するようになる。（図５・5-1）この目鼻立ちがくっきりとした西洋の塑像、石像のような趣きの横顔には表情がない。それまで作品に人物（正確には人物の顔）を描くことがなかった野村であったが、本ノートが使用された90年、人物の横顔を構図の中心に据え、象徴的に用いたアクリル画を複数制作している（図５・5-4、5-5）。野村にとってこの横顔は、画面構成上において、また主題上においても重要な意味を持つモチーフであり、今後は継続して取り組む予定であったと考えられる。

（６）制作ノート６　「1991.1～」

没するまでの３か月間にあたる、野村の最後の自筆である。（５）制作ノート５に続いて人物の横顔を配置したアイディアスケッチ、エスキースが多く描かれる。またそれらの画には暗色（黒色）の面積をより明確に、厳密に計画しようとする意図が見える。（図６・6-1）抑制された色調、色数を基調とする野村の絵画は、陰影のバランスがその画感の良否を大きく左右するであろうし、あるいは彼が得

意とした書道の影響をここにも看取することができるかもしれない。

また本ノートには、デフォルメされた動物のイラストやロボット、漫画風のキャラクター等、より自由で柔軟な印象の絵が他のノートよりも多く描かれている。それらの中には、幼き野村が心惹かれたというアニメーション、特撮番組に登場するメカニックや異星人の姿もある[8]。彼の作品を世代論から解読する試みもなされているが[9]、今日の視点で見れば、野村が活動した80年代終盤から90年代にかけては、美術のメインカルチャーとサブカルチャーの境界において、美術の想像力が拡大を見せた時期であった。小谷野氏が論述しているように[10]、野村の作品に現われたイメージ、世界観には、漫画やアニメーションといったサブカルチャーのイメージからの影響も少なからず認められよう。

本ノートの末尾には、全面にびっしりと小さな文字で「チクショウ」と書かれたページがある。奇しくもこれが野村の制作ノートに書かれた最後の文章ー文字である。彼の感情の爆発の理由は知る由もないが、日常において、ノートを片時も離すことがなかったのであろう。

おわりに　「制作ノート」が伝えるもの

本稿では紙幅の都合上、「制作ノート」全体の概要を紹介するに留めざるを得なかったが、本稿で述べてきたとおり、本ノート群に含まれた情報は極めて濃密であり、個々のノートについての詳細な紹介と考察には相応の紙幅と時間が必要であろう。これらノートは画家野村昭嘉―彼は画学生から画家へと成長を遂げる過程の若者でもあった―の、表現と心の軌跡であり、彼の野村昭嘉の人と芸術についての「検証」となり、また「意外な発見」[11] にもつながり得る重要な資料であると筆者は確信している。今後、継続して調査し、より完全な形での内容の紹介と考察を行いたい。

（付記）

野村昭嘉の「制作ノート」の文字起こしは、陣内裕美が行い、「野村昭嘉制作ノート翻刻集（暫定私家版）」（2021年）」として纏められている。本稿中で「制作ノート」から引用した記述は全て同翻刻集に基づくものである。

註）

（１）全６冊中の最初のノートの表紙に、正確には「製作ノート」と記されている。これは野村自身が記したものと考えられるが、「制作ノート」とするほうが、ノートの性格と内容をより的確に伝えるものと考える。したがって本稿では「制作ノート」と呼称している。

（２）正木基「野村昭嘉の絵画―化石化された20世紀」（『野村昭嘉作品集 1964～1991』発行：野村昭嘉作品集刊行委員会、株式会社リブロポート、1993年９月　所収）pp. 73～74

（３）1969（昭和44）年に現代思潮社によって新宿区若葉町に創立された私塾。美術をはじめ音楽、メディア表現の技術講習と講義からなる。野村が在学した頃の講師に菊畑茂久馬（絵画）、吉田克朗（版画）らがいた。

（４）1982（昭和57）年、学校法人中延学園により品川区に設置された専門学校。略称「ＴＳＡ」。本科２年、研究科１年（1989年当時）。2000（平成12）年に休校している。

（５）野村のアクリル画については、画材と制作工程ともにその大部分が解明されている。主要文献として小谷野匡子「野村昭嘉の絵画技法と素材」（『野村昭嘉作品集 1964～1991』発行：野村昭嘉作品集　刊行委員会、株式会社リブロポート、1993年９月　所収）、塩月悠「絵画技法ー考察ー有元利夫と野村昭嘉のマチエールについて」（『児童教育支援センター年報』2013年）がある。

（６）加藤貞雄「《追悼・野村昭嘉展》に際して」（『追悼・野村昭嘉展　化石化された〈太古・20世紀・未来〉図録』所収　目黒区美術館　1994年）

（７）野村の資料中には「遮光器土偶」の緻密なデッサンが残っている。また、円窓が開いた潜水服のイメージは、ヴェルヌの「海底２万哩」の挿絵等の影響も想像できよう。

（８）アニメーション「未来少年コナン」（1978年）、特撮ドラマ「キャプテンウルトラ」（1966年）等を参考にした絵が描かれている。

（９）（２）正木論考　pp. 74～75

（10）（５）小谷野論考　p. 85

（11）大宅加寿子は「野村昭嘉　制作ノートより」で、「すでに彼の絵に触れてきたものにとっては、検証となるのか、意外な発見となるのかは断言できないが」と評している。（『野村昭嘉作品集 1964～1991』発行：野村昭嘉作品集　刊行委員会、株式会社リブロポート、1993年９月　所収）p. 76

（のなか・こうすけ／佐賀県立美術館学芸員）

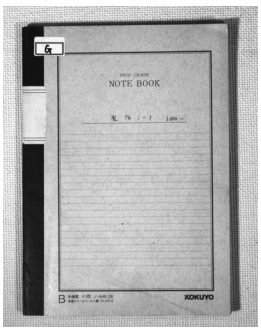
野村昭嘉　略年譜

本略年譜の作成にあたっては、主に以下の文献、記事を参照した。
（１）『野村昭嘉作品集　1964～1991』（発行野村昭嘉作品集刊行委員会、株式会社リブロポート、1993年９月）
（２）『追悼・野村昭嘉展　化石化された〈太古・20世紀・未来〉展覧会図録』（発行目黒区立美術館、1994年12月）
（３）菊畑茂久馬「続・絶筆　いのちの炎　４」（西日本新聞記事、1996年１月26日）
本略年譜には各「制作ノート」の記述内容について、書かれた年月と併せて記した。
また、一部の経歴について菊池靖氏から教示を受けた。

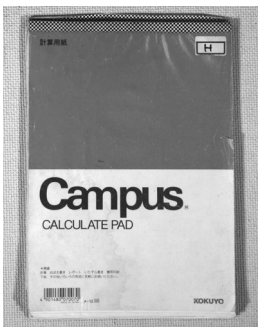
西暦 和暦	年齢 （満年齢）	野村昭嘉の事象	制作ノート 記述年月日	制作ノート記述内容
1964 昭和39	0	12月14日、佐賀市水ヶ江に野村政弘・道子両氏の長男として生まれる。		
1969 昭和44	4-5	諸富北幼稚園入園。この頃から絵を描くことを好み、動物図鑑、学習図鑑シリーズ、なぜなに学習図鑑シリーズ等を愛読する。		
1974 昭和49	9-10	小学校は諸富北小学校に通う。高学年時には子ども県展（主催・佐賀県造形教育研究会）に入選、受賞する。 9歳の頃、読書に親しむよう両親から「ファーブル昆虫記」を与えられる。その影響から昆虫の絵を好んで描く。		
1977 昭和52	12-13	3月、諸富北小学校卒業。 4月、諸富中学校入学。毛筆書写技能検定で4級に合格するなど、中学では書道で目覚ましい活躍をしつつ、佐賀県学童美術展でも受賞を果たす。		
1980 昭和55	15-16	3月、諸富中学校卒業。 4月、佐賀県立佐賀北高等学校入学。 高校時代は生物部に入部。昆虫標本を作製する。 ポスターコンクールで特選、体育祭アーチ部門で優勝等、美術が大の得意であった。卒業時に校舎のスケッチと似顔絵を色紙に描き、クラスメートと交換する。		
1983 昭和58	18-19	3月、佐賀北高校卒業。 4月、上京。立川美術学院入学。 「（略）田舎で絵が一番上手だと自信を持って上京した私は、野村君を知り、実は自分が一番下手だということを知る。その学校でも野村君はトップクラスにいて、私は野村君の絵をうらやましそうにながめる多くの生徒の中の一人でしかなかった。（略）」 （西原理恵子「野村君のこと」（野村昭嘉遺作展　作品集刊行に寄せて　所収　1993年9月）		
1986 昭和61	21-22	4月、美学校に入学。絵画教場（講師菊畑茂久馬）に入る。 「（略）上京して四年目の春、私が教えている東京神田の美学校に、一人のぼってりとした体躯のおとなしい青年が入学した。（略）同じ九州出身の私の教室を選んだのには、何かすがるようなおもいがあったのだろう。（略）」 （菊畑茂久馬「続・絶筆　いのちの炎　4」（西日本新聞記事、1996年1月26日））	1986.12	［制作ノート1「（1986～］ 《ノクターン》5点の連作の概要 ア　作品《星の図》のマチエールについて イ　作品《モルトプのプール》のマチエールについて
1987 昭和62	22-23	3月、美学校、絵画教場終了。 4月、東京芸術専門学校（TSA）に入学する。（2年に編入学）版画家の吉田克郎に出会う。吉田には多くの示唆を受けたという。 「（略）ここで私と同じ美学校で教えていた版画家の吉田克郎先生に出会って、やっと精神の自縛から解放されたようだった。ここから俄然野村の才能が開花しはじめた。（略）」 （菊畑茂久馬「続・絶筆　いのちの炎　4」（西日本新聞記事、1996年1月26日））	1987.5 1987.6 1987.6.18 1987.6 1987.7.30 1987.8 1987.10	フレスコ画風の雲の描写 直立歩行するカエル、カラスの頭部の天使 ヴィーナス三態 テンペラ・油彩・混合技法解説 テンペラとは何か/テンペラの歴史的発展/ハッチング技法について/混合技法の層形成 自身の作品の主題について 「存在している自己」について 自作についての考察 人間の知覚等についての考察 自作と「絵画」についての考察
1988 昭和63	23-24	7月、グループ展「したい見たい聞きたい」（7月14日～24日、目黒区美術館区民ギャラリー）に参加する。（参加者は室井智佳子、東郷るみ子、須藤恭代、福島昭子、林川秋子、菊池靖、星美、花野篤、古賀飛、見崎充子、秋谷英子、山形雅史、森田智子、野村昭嘉、石川智太郎、三浦由起子） 9月、「JACA'88日本イラストレーション展」にて《雲の製造Ⅰ》《雲の製造Ⅱ》が銅賞を受賞。東京展（伊勢丹美術館）、川崎展（川崎駅前市民ギャラリー）、名古屋展（生活創庫・アピタ・名古屋駅店）、インドネシア展（ジャカルタ、バンドン、スラバヤ、メダン）、タイ展（バンコク）を巡回。	1988.1 1988.2 1988.3 1988.4 1988.4.17 1988.4.24	「フレスコ画風」の作品への取り組みと今後の活動について マーラーへの傾倒 宗教絵画の印象 「ワイエス展」の感想と批評 「幻想科学小説」への傾倒と自作の解説 「科学」に対する論評 自己の創作のスタイル、方法論について 「ホルスト・ヤンセン展」の感想と評論

西暦 和暦	年齢 （満年齢）	野村昭嘉の事象	制作ノート 記述年月日	制作ノート記述内容
1988 昭和63	23-24	9月、初の個展「野村昭嘉展」を開催する。（9月19日～24日、ギャラリー・アルファ、品川）。 9月、「フレッシュアート・国際交流展」（9月30日～10月5日、主催中延学園高等学校、東京芸術専門学校、0美術館、品川）。	1988.7 以前	「卒制に向けての平面構成」 印章のデザイン/画 ［制作ノート2］ 「野村昭嘉展」個展の看板デザイン 「したい見たい聞きたい」展看板デザイン
1989 昭和64 平成元	24-25	『中央公論』2月号に作品《雲の製造Ⅰ》とともに解説文「共存する太古と未来」が掲載される。 2月、東京芸術専門学校卒業制作展「秘蔵の一撃」（2月13日～18日、主催：TSA卒展委員会） 野村は菊池靖とともにモリス・ギャラリー（銀座）で展示。 6月、「第5回コンテンポラリーアートエキスポ東京'89」にて金賞受賞(6月4日～7日、主催：コンテンポラリーアート協会、ミカルディ・スペース、銀座)。 10月、吉田克郎の個展（東京画廊）を訪問。		
1990 平成2	25-26	10月に帰省。帰省時に実家で作品《Oeret》を制作する。実家では音に敏感で、掛け時計の時報を止めたり、電話のベルの音を低くしたりした（父政弘氏の証言） 9月、「JACA'90日本イラストレーション展・招待部門JACAセレクション展」に13点連作のアクリル画を出品(伊勢丹美術館)。 11月、「第14回九州青年美術公募展」に《Oeret》を出品、奨励賞受賞(大牟田文化会館)。	1990.7 以前？ 1990.4？ 1990.8 以前？	［制作ノート3　「1990-1-7」］ 「タスマニア物語のポスター描きたい」 熱帯魚（アホロートル）の餌やりスケジュールらしきものの記述 「JACA90日本イラストレーション展」制作と搬入等のスケジュールの記述
			1990.11？	［制作ノート5「1990.8－12」］ ※アナグラムが登場。 「九州青年美術公募展」表彰式の記述
1991 平成3	26	2月、「第3回リキテックス・ビエンナーレ展」に《AmosuNorle》を出品。大阪展(なんばCITY南館B1、シティホール)、東京展(有楽町朝日ギャラリー)、札幌展(大丸藤井セントラル7F、スカイホール)を巡回。 3月16日、午前9時30分ごろ、東京都立川市曙町一丁目のビル工事現場で、重さ100トン、高さ30mの杭打ち機が倒れ、隣接していた野村が住むアパートを直撃、亡くなる。部屋に保管されていた作品も破壊されたが、家族と友人らの尽力により回収され、株式会社絵画保存研究所にて修復された。 6月、銀座ギャラリーFUMIにて「野村昭嘉回顧展」が友人ら関係者の手により開催。	1990.1 1990.2 1990.2.12	［制作ノート6「1991.1」］ 最初のページに「3.1.12」等のスタンプ 書棚の設計図？ 「上野の森美術大賞展」2/18-19　10:-17:00の記述。 Pm3:13　J.Wカンサス？ 「チクショウ」の記述
1992 平成4		7月、「野村昭嘉回顧展」（赤坂・LA CAMERA）が開催される。 7月赤坂ギャラリーLACAMERAにて「野村昭嘉回顧展」開催。		
1993 平成5		12月、「野村昭嘉回顧展」（佐賀県立美術館）が開催される。郷里での初めての展覧会であった。		
1994 平成6		12月、「追悼・野村昭嘉展　化石化された〈太古・20世紀・未来〉」が開催される。（目黒区美術館、～1995年1月16日）		
2013		遺族より野村昭嘉の作品及び創作ノート等記録、計95点が佐賀県立美術館に寄贈される。 9月、「夭折の画家　野村昭嘉」（佐賀県立美術館）が開催される。		

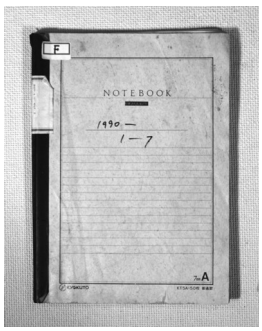
（図１）　野村昭嘉の「制作ノート」表紙



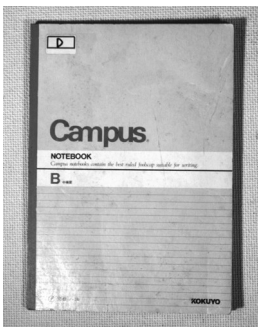
1-1



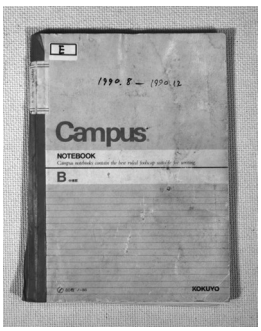
1-2



1-3



1-4

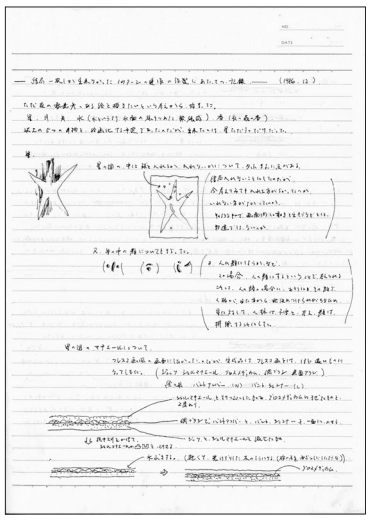


1-5

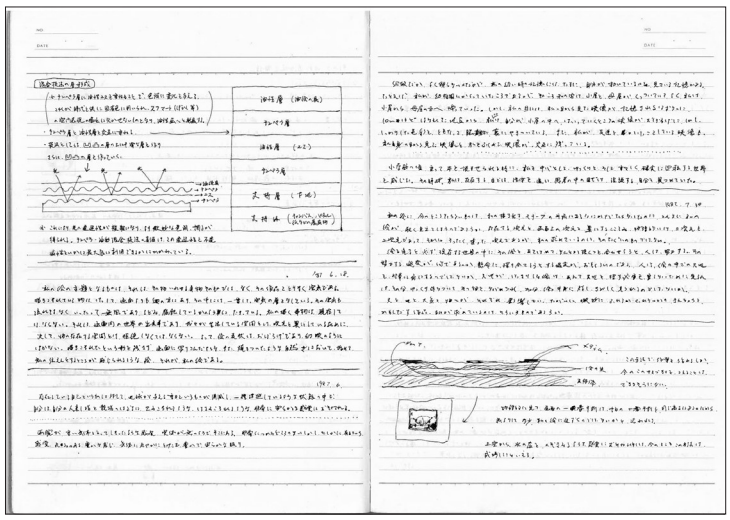
1-6

番	名称	製品名称・種類等	寸法（cm）	表紙題名
1-1	制作ノート1	コクヨ製　B中横罫　40枚 HIGH GRADE NOTE BOOK	25.1×18.0	製作ノート （1986～）
1-2	制作ノート２	コクヨ製　計算用紙　Campus　CALCULATE　PAD	25.0×17.8	
1-3	制作ノート３	極東ノート株式会社製 7mmA　KT5A　50枚 普通罫　NOTEBOOK	25.0×17.7	1990―1―7
1-4	制作ノート４	コクヨ製　B中横罫　30枚　Campus NOTEBOOK	25.2×17.9	
1-5	制作ノート５	コクヨ製　B中横罫　80枚　Campus NOTEBOOK	25.0×17.8	1990.8―1990.12
1-6	制作ノート６	ツバメノート株式会社製 W30S 十条製紙特抄中性紙フールス　NOTEBOOK	25.3×17.9	1991.1～

（図２）制作ノート１



2-1



2-2

私の絵の主題となるものは、それは、その物にいわゆる事物そのものではなく、その作品をとりまく空気である。描きこまれている物は、けっして、画面よりも奥の方にあり、その中には、一貫して、空気の層をなしている。その空気も流れはなく、いったって無風であり、よどみ、腐蝕しているかのようにたまっている。私の描く事物は、現存してはならない。それは画面内の世界の出来事であり、我々が生活している空間とは、次元を異にしているために、決して、物の存在する空間とは拒絶しなくてはならない。よって絵の表状はおぼろげであり、幻映のようにはかない。描きこまれたという形を残さず、画面に写りこんだような、また、焼きついたような自然において、始めて私の伝えんとするところが、感じられるような絵、それが私の絵である。　（本文中　⑦1987.6.18　自身の作品の主題について）

私の目先す作品は、最終的には1つであるといえる。それは、美でありまたフィルムもかねあった荘厳な雰囲気を持ついいかえてみれば、常につつみこんだ珠玉のような作品を描きたいものだ。

現在美術は多方面にわたっているが、やはり古い描写法であってもやっぱり美しいものは、美しい。

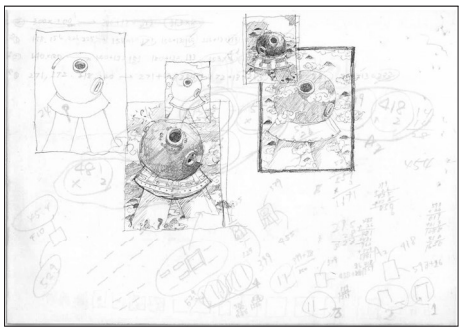
今どんなに斬新で、世件受けしてても、すぐにあきられる作品は美とはみとめない。それは、いろいろなこころみもおもしろいと思うが、後々までも生きる息の長い作品がこのましいと思う。芸術破壊多いにけっこう。やれるもんならやってみろ。私の作品をたたくのならば、たたけ。私の作品を知るものは、私のみ。

（本文中　⑪1987.10　自作と「絵画」についての考察）

（上記引用部分「野村昭嘉構想ノート翻刻集（暫定私家版）」（2021年）による）

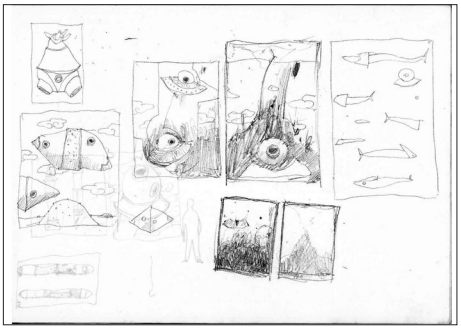
（図３）制作ノート２

3-1

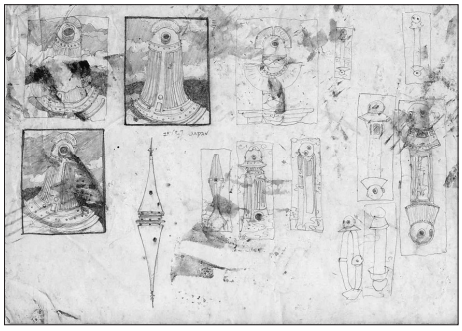


3-2

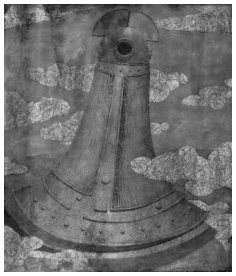
3-5
《不詳》1988年
アクリル・板　53.0×45.5cm
佐賀県立美術館蔵



3-3



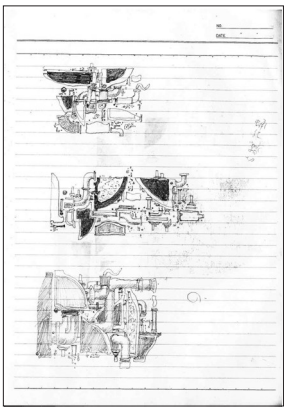
3-4



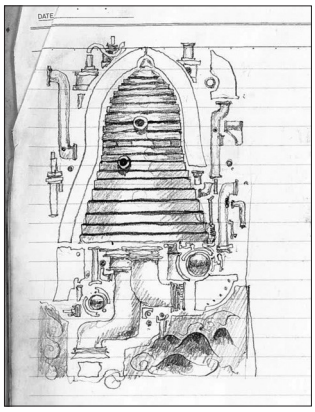
3-6
《不詳》1988年
アクリル・板　53.0×45.3cm

図解と文章を主にした制作ノート1とは異なり、数々の下絵、エスキース、スケッチ等、描画中心の内容である。矩形で囲まれた絵も多く、今後タブロー（着彩の完成作品）としての制作を意識しながらの描画であったことがうかがえる。なお、一部はタブロー化されている。

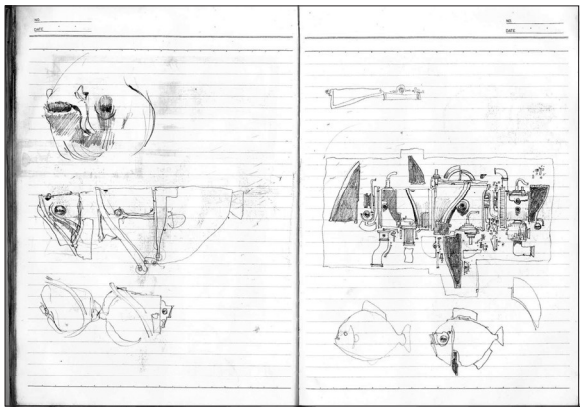
（図４）制作ノート３



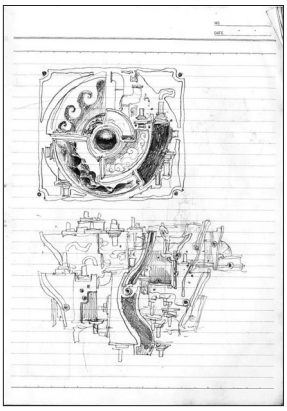
4-1



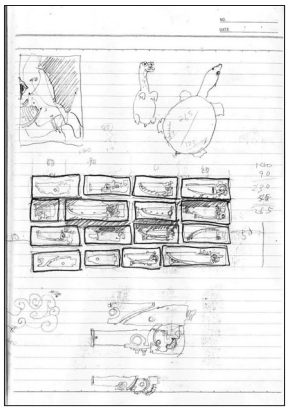
4-2



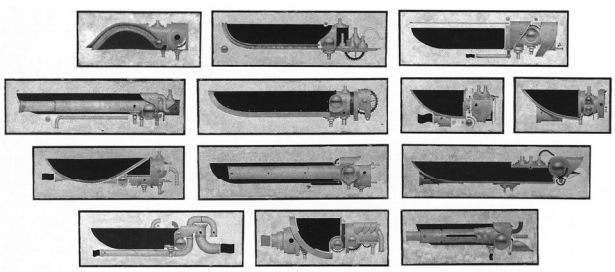
4-3



4-4



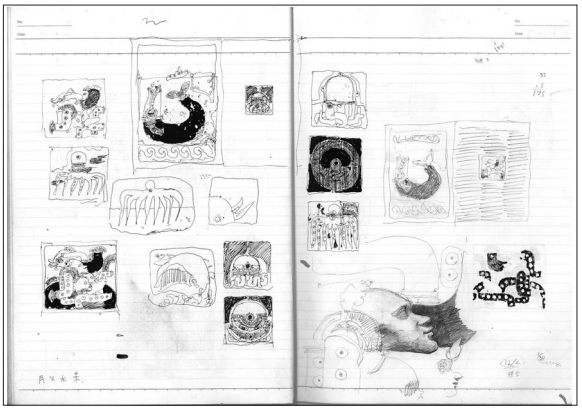
4-5



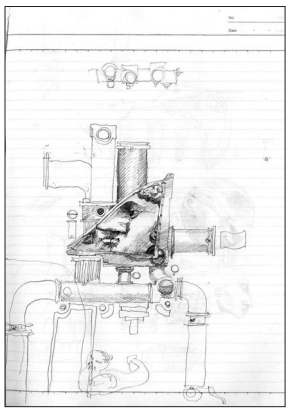
4-6
《不詳（13点連作）》アクリル・板　1990年
「JACA'90日本イラストレーション展・招待部門JACAセレクション展」（1990年9月）出品作品

野村は1986年以降も連作に関心を持ち続け、ノートにはいくつもの連作のアイディアが描き残されている。そのうちの一種類がタブロー化されている。ただしエスキースでは16点の構成であったが、完成作は13点であった。「JACA'90日本イラストレーション展・招待部門JACAセレクション展」（1990年9月）に出品されている。

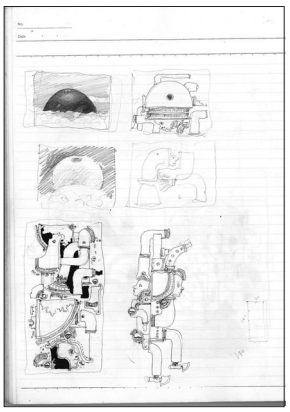
（図５）制作ノート５



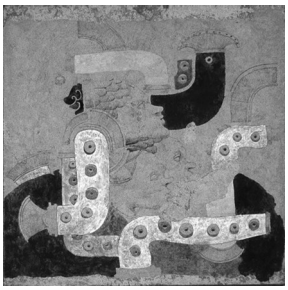
5-1



5-2

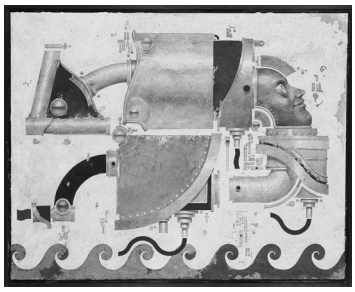


5-3



5-4

《不詳》（未完成作品）1990年
アクリル・板　30.1×30.1cm
佐賀県立美術館蔵

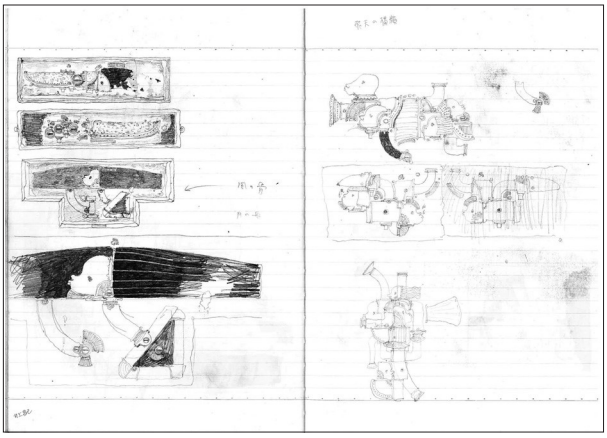


5-5

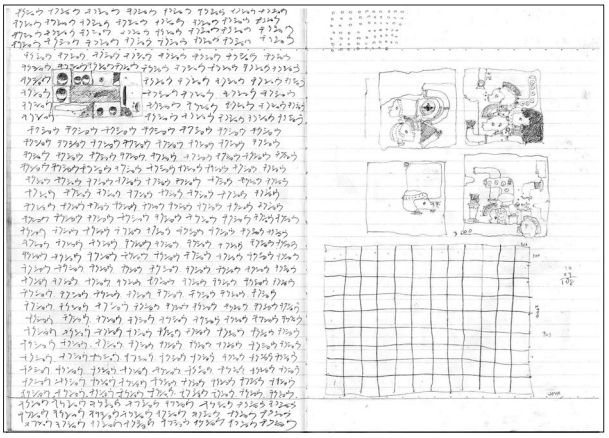
《不詳》1990年
アクリル・板　30.0×30.0cm
佐賀県立美術館蔵

本ノートから人物（人間）の横顔のスケッチ、またそれを構成要素の中心としたエスキースが頻出する。野村の制作ノートには、随所に生物や動物のスケッチが見られるが、人物はほとんど描いていない。作品に人間の姿を象徴的に描くという新たな試みに、意欲的に取り組んでいる様子がうかがえる。

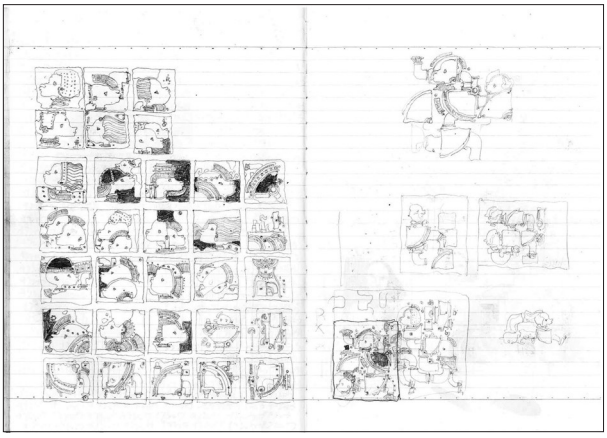
（図６）制作ノート６



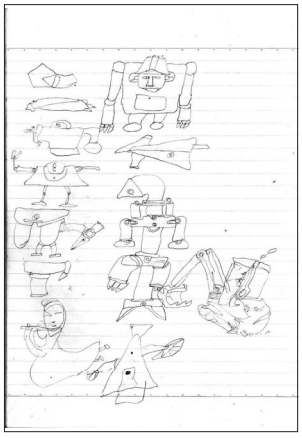
6-1



6-2



6-3



6-4

1991年1月から記述が始まる、野村の残された最後のノートである。

制作ノート５に引き続き、人物の横顔を中心にした作品のエスキースが多く描かれている。一方で動物やロボット等の戯画も見られ、野村の幅広い関心と画力を伝えている。

ロボットの描写は「未来少年コナン」に登場するメカニックを思わせる。野村の画風はアニメーションや漫画の影響も少なくない。